公民館における市民企画による環境学習講座プログラムの形成過程
―「市民自主企画講座会議」への参与観察を通して―

赤　尾　勝　己

1．成人教育プログラム計画理論からの示唆

近年，いくつかの自治体において，公民館などの生涯学習関連施設において，市民企画委員と職員が協働しながら，現代的課題に関連した講座プログラムを企画し実施していくことがなされている。（赤尾　2002）こうした市民参画の動きは，社会の成熟化の中で，先鋭な問題意識をもった市民が出現しつつあることを示している。本稿は，公民館において，環境学習プログラムを市民と職員が協働して企画していく様子を記録・分析していく中で，今後増えていくことが予想される市民企画講座プログラムの開発プロセスに共通する特質を抽出していくための基礎資料を提出することを目的とする。本稿では，2003年６月～８月に，兵庫県Ｉ市立中央公民館の「市民自主企画講座会議」の参与観察を行い考察した成果を公表する。

そこで本節では，市民自主企画講座プログラムが形成されていく過程を分析する理論枠組みを得るために，アメリカにおける成人教育プログラム計画に関する理論を概観する。第２次世界大戦後のアメリカの成人教育プログラム計画理論に大きな影響を与えた研究者としてノールズ（M. Knowles）の存在は大きい。しかし，1990年代中頃から，新たなプログラム計画理論が展開されている。ノールズは，成人対象の学習プログラムを作成するにあたり，当該の成人がどのような学習についての関心（interests）や要求（needs）をもっている

かを第1に考慮すべきであると論じる。彼は学習者のニーズ評価から始まり，ニーズをプログラムの目標に変換する手続きをとるというプログラム計画理論を提示した。それは，個人のニーズ，組織のニーズ，地域社会のニーズを，運営的ニーズと教育的ニーズに分けて，機関の目的，実行可能性，対象者の関心というフィルターにかけ，そこで残ったニーズからプログラムの運営的目標（operative objectives）と教育的目標（educational objectives）を生み出すのである。（Knowles 訳書，160-170頁）ノールズのプログラム計画理論は，ニーズ至上主義に基づいている。ここではたしてプログラムを計画する際に，ほんとうに学習者のニーズ調査を先に行う必要があるのであろうか。実際に，熟達した成人教育プログラム計画者たちは，学習者のニーズ調査を先に行っていないように見える。

これに対して，カファレラ（R. Caffarella）は，ノールズの，学習者のニーズに基づくプログラムづくりのアイデアを引き継ぎながらも，次のような独自なプログラム計画理論を展開している。

「プログラム計画に関するいくつかのモデルは直線的（linear）である。これらにおいては，教育者は段階1から始めて，その過程が完成されるまで，それに続く順序で各々の段階に従うことが期待される。こうしたタイプのモデルは，初心者には役立つかもしれない。しかし，それはやがてその力を失う。なぜなら，それは，ほとんどのプログラム計画者の日々の仕事の現実を表わさないからである。直線的なアプローチに代わるものは，プログラム計画をひとまとまりの相互作用的でダイナミックな要因や要素，決定の点からなる過程として概念化することである。」（Caffarella p.8.）

そして，カファレラは次のような相互作用モデル（interactive model）によるプログラム計画理論を提起する。

「経験豊かな実践者は，プログラム計画の過程が，本質的に，教育者，学習者，組織間での協議された活動であることをわかっている。プログラムは一人の計画者で作られることはめったにない。むしろ，たいていの成人学習者のためのプログラムは，その内容や形式に深いレベルで影響を与えている特殊な制度上

の文脈で働いている多くの関心をもつ人々によって作られている。それゆえ，このプログラム計画を使う鍵は，柔軟性（flexibility）である。本質的に，そのモデルの使用は，特殊な計画状況の要求に見合うように仕立てられるべきである。」（Caffarella pp.18-19.）

そして，成人教育プログラム計画の前提として次の６つが示されている。

1．教育プログラムは，参加者が実際に何を学ぶのか，どのようにしてその学習が，参加者，組織，あるいは社会的問題や規範に変化をもたらすかについて注目すべきである。

2．プログラムの計画はシステマティックで，前もって計画された課題と独立した決定を含む。

3．教育プログラムの開発は，施設での優先順位，課題，人員，行事間の複雑な相互作用の成果である。

4．教育プログラムの開発は，運営的な努力というよりは協働的な営みである，

5．教育プログラムの開発は，実践的な技術である。成功につながる唯一の方法はない。

6．各人は，一つあるいは複数の計画方法を手引きとして利用して，実践を通してより効果的なプログラム計画者となるように学ぶことができる。（Caffarella p.22-24.）

このうち１．は，次に見るセルベロとウィルソン（R. Cervero & A. Wilson）の論じる，プログラム計画実践は社会を作る行為であるというモチーフに通じている。また，３．と４．は，本稿で扱うような市民企画委員と職員が協働してプログラムを作っていく中で，何が優先されていくかを見ていくことに関わる。

さらに，カファレラは，成人教育施設において，倫理的な要素を持ったプログラムの決定をする際に，「プログラム計画者の個人的な信念」（personal beliefs of program planners），「地域社会と社会の信念」（community and societal beliefs），「専門職としての倫理コード」（professional code of ethics），「組織上の信念」（organizational beliefs），「教育部門の信念の表明」

(belief statements of educational units) という5つの信念が考慮されているとしている。(Caffarella p.38.) ただしここで，カファレラはこれら5つの信念の力関係の強弱については言及していない。筆者は，これらの5つの信念を参考にしながら，後節のI市立中央公民館での環境学習という倫理的なプログラムを作る際に，どのようなマクロな影響要因が働いているのかを考察したい。

一方，セルベロとウィルソンは批判的計画理論の立場から，成人教育プログラムを計画することは，技術的な過程ではなく，個人的・組織的な関心を協議する社会的な活動 (social activity) であるとして，次のような理論を展開する。

「すべての計画者は，彼らが自らの関心を直接，プログラムの目的，内容，フォーマットに変換できる自由な主体 (free agents) ではないことを知っている。計画は常に，プログラムについて同様なまたは相異なるあるいは葛藤しあう関心をもった人々の間での，複雑な個人的・組織的・社会的諸関係においてなされる。計画者の責任およびその実践の中心的な問題は，プログラムを構成するうえで，どのようにこれらの人々の関心を協議 (negotiate) するかに集中する。」(Cervero & Wilson p.4.)

「本質的に，計画は社会的行為である。その中で，人々はプログラムの目的，内容，参加者，構成を含むプログラムの形態をめぐる問題に答える際に，協議するのである。教育的プログラムは，施設や社会的文脈の外部にいる一人の計画者によって構成されることはありえない。むしろ，プログラムは，その内容や形態に大きく影響を与える特殊な制度的文脈において働いているさまざまな関心をもった人々によって構成されているのである。実践を社会的文脈に位置づけることで，計画者の行為は，複雑な権力関係と関心の世界と密接に結びつくのである。」(Cervero & Wilson p.28.)

セルベロらは，ハーバーマス (J. Habermas) の技術的合理主義批判をもとに，従来の専門家や官僚による一方的な計画行為に代えて，計画に利害関係のある人々 (stakeholders) による論争を通した計画 (argumentative planning) という都市計画学者フォレスター (J. Forester) の次のようなモチーフを，成人教育プログラム計画理論に適用したのである。

「計画は，未来の行為を導くことである。激しく関心が葛藤しあい，地位と資源の不平等が大きな世界においては，権力に直面した計画は日々必要であるだけでなく，常に倫理的な挑戦なのである。……計画者は，中立的な局面や，あらゆる影響力のある関心が声を有する理想化された環境において仕事をしているのではない。」(Forester p.3.)

セルベロらの理論においては，プログラム計画者が社会のあり方を問題にしながら，計画者間の力関係に着目している点が特筆される。[1] 協議の過程で，複数の計画者のうち誰の意見がプログラム計画のテーブルにおいて支配的であるのか，それはなぜか，さらにそこでの意見の葛藤がどのように解決されて一つのプログラムへと結実していくのか，というミクロな権力関係を問うている。こうした観点は，次節でみる公民館の市民自主企画講座会議のテーブルにおける市民企画委員間および職員との協議内容を分析することに関わってくるのである。

本稿ではこのように，カファレラとセルベロらの新しい成人教育プログラム計画理論を参考にしながら，公民館で市民と職員が協働しながら，環境学習プログラムを作っていく過程を記録・分析していく中で，「市民自主企画講座会議」をめぐって，どのようなマクロ～ミクロ・レベルでの影響要因が働いているかを明らかにしていきたい。

2．市民自主企画講座会議での協議の過程

Ｉ市立中央公民館では，すでに市民企画講座として，1996年度から，市民が企画書を提出することによる「市民カレッジ」が行われていたが，毎年コンスタントに開催できる状態ではなかった。そこで，2003年度から，市民の中から企画委員を公募しての協議による「市民自主企画講座」を始めることになった。Ｉ市では2003年10月から環境条例が施行されることになり，同公民館はそれに合わせ，学習のテーマを「環境問題」に設定した。

企画会議の開始に先立ち，同館館長は挨拶の中で，これまでの講座プログラムの作成では，「職員だけで講座プログラムを決めて，市民の参画がなかった」

「職員の専門分野だけで決められてしまうことがままあった」ことを指摘し，今や「参画と協働」の時代を迎え，公民館は市民との協働で，人権，福祉，環境等の市民的課題に取り組むことが必要であると述べた。

2003年度に応募してきた市民企画委員は男性5名，女性2名の計7名であった。企画会議には，初回は事務局側として，館長，職員2名の計3名が出席した。筆者は，傍聴人として，会議中は一切発言をしないという条件で，録音と記録をとることが許可された。以下に各回の会議の中で講座形成に関わる重要な会話を抽出した。企画委員はA～Gで，職員はHと表示した。（会話部分の傍線は筆者による）各回の会議は午後7時から開催された。

・第1回会議　6月13日　出席者9名　企画委員6名出席　事務局から3名出席

今回は自己紹介の後で，各企画委員が環境問題についてどのような問題意識を持っているかが語られた。

A「ゴミの仕分けがめんどうくさい。家の中でどうしてもうまく分別できない。」

B「環境問題を起こす人間に興味がある。温暖化にしても，このままやっていくとまずくなるのに，なんで経済を発展させていくのかね。……一定期間ビデオを上映して，最後に誰かに話をしてもらうのがいい。」

C「若い頃，会社で研修プログラムを苦労して作ってみたことがある。環境というととっつきづらいと思いますので，座学だけではあきてくるので，知識だけでなく，クリーンセンターを見に行ったり，一本調子にならないように変化をつけることが必要だと思う。5W1Hを意識してみる。Where What：どこでどんな問題が起こっているか？　Why：なぜそんな問題が起こってくるのか？　When：いつか？　How：どうしたらそれを解決できるか？　温暖化のしくみは難しいですからね。ダイオキシンの話をいきなり言われても難しい。」

D「環境って範囲が広いので，オムニバス形式でやるのがよいのかなー。オムニバスの中で，ゴミ，温暖化，などを入れてみるとよいと思う。子どもと大

人が参加して，身近かな自然に出かけてフィールドワークをやれるようにしたらどうか。」

E「ゴミ関係の審議会に参加しています。T市・I市のクリーンランドを見に行ってきました。ペットボトル1本あたり20円かかる。I市は頑張っているが他市町はずさん。」

G「道路問題と河川問題で提起したい。旧市街地に狭い道がたくさんある。これはバリアフリーとも関わる。道路幅を広げてほしい。県や市は道路行政をどうしようとしているのか情報を開示してもらう。……水害対策だけでなく，美観をもった堤防をつくる必要がある。更地問題についても考えるべきだ。」

ここで，Cはかつて会社の研修プログラムを作った経験から，プログラムの構成，とりわけ学習方法について変化をつける必要があるという明確なビジョンをもっている。Gの考えは，環境問題を超えて都市計画全般に関わっており，道路と河川に関わるI市やH県の行政の取り組みについて一定程度，批判的な見解をもっていることが看取された。

・第2回会議　6月27日（出席者7名　A　B　C　D　E　G　H）

今回は，講座参加者の参加料金についての議論があった。

C「参加費用についてどう考えていますか？」

H「講座の回数によって決まります。4回だと1300円，10回以上だと2000円で，だいたい7回で1700円ぐらいの値段になります。」

C「値段は低いほうがいい。無料とか。そうすると啓発もやれると思うんだけれど，ふつうの料金をとって，こうしなければならない，資源ゴミは分別しなさいと言われるのはちょっと……。」

H「たんに知識を得るだけでなく，アクションを起こしてもらうことまで考えて，そうした内容にしたいと思います。座って堅苦しい話を聴かされるというだけでは……」

C「費用はできるだけ低くしたほうがよいのではないですか。」

H「お金を払ってもらうことで，途中の脱落を防ぎたいと思っています。」

ここでCは，講座の内容が啓発的なのでできるだけ参加料金は低くすべきだ

と主張しているが，Hはそれに同意せず，わかりやすく，おもしろく，押しつけにならないような学習方法を考えていきたいと答えている。(結果的に参加料金は全回通しで1000円となった)

Bは前回会議の翌日に個人的にHを訪ねて，高木善之著『世界再生の道』ビジネス社，2001年を推薦している。今回，Bは環境問題の学習がまちづくりへと発展していくことを次のように述べて，Hもそれに同意している。

B「環境問題がまちづくりという問題に行きそうですね。」

H「いい展開だと思いますよ。よりよいI市のまちづくりにつなげていきたいですね。」

・第3回会議　7月11日（出席者6名　A　B　D　E　G　H）

冒頭で，Hによって，次のような原案が黒板に板書され示された。今回は，この内容と順序について意見が交わされた。

環境　第1回　地球環境の現在と未来
　　第2回　I市環境条例のあらまし
　　第3回　Iのゴミについて（分別　市の取り組み）
　　第4回　環境家計簿
　　第5回　子どもと紫外線
　　第6回　子どもと環境教育　　環境先進国と日本の現状

ここで，第5回の「子どもと紫外線」について次のような協議がなされた。

B「今，総合学習などでやっていると思うので，学校関係者の方に来ていただいて話をしてもらうとか……」

D「子どもと紫外線だけで1時間もたせるというのはきついかなと……」

G「今日なんか晴れていてプールに入っていますね。子どもたちが紫外線を浴びているんです。そのことを先生方がどう考えているかを聴きたい。」

H「紫外線で単独だと，（講座実施は）秋なんで……夏だとタイムリーなんですがね。」

子どもと環境教育について次のような協議がなされた。

H「ネックなのは環境教育ですね。子ども向けの環境学習のイベント講座を別

に考えていくことにしますか。」

D「これが正しいと押しつけるのはよくないと思います。」

H「これを聴いてもらって，皆さん考えてみましょうというのがいいですね。」

B「環境先進国ヨーロッパのとりくみの中に，環境教育を含めてみたらどうですかね。」

H「そういう話をしてもらえる先生がいるかどうか。皆さん，そういう先生を見つけてみましょう。」

職員Hは，その後，講座プログラムの作り方について市民企画委員に対して次のように発言している。

「講座づくりで一番困るのは，いい先生が見つかっても，断られた時です。あとは順番ですね。大きな問題から徐々に絞っていくか，あるいはおいしいものをはじめにもってきて，中頃にそうでないものを入れるとか，最後にすごいものをもってきてシメて「紅白歌合戦」的にやってみるとか……」

これはHの同公民館での講座プログラムづくりの経験から出された「知見」である。そして，この企画会議のまとめ役がようやく板に着いてきた表れでもある。

・第４回会議　７月25日（出席者６名　A　C　D　E　G　H）

冒頭で企画案が配布され，前回までの意見を基にしておおまかな方向性が出た。この中の「Ｉのゴミ最前線～分別からリサイクルまで～」の実施方法について，次のような意見のやりとりがあった。

H「マイクロバスは使えないので，受講者の方を施設見学させることは難しいです。７月15日のＩ市の「広報」で，まちづくり出前講座「ゴミ問題」をやることになりました。向こうは無料でやるわけです。こっちはお金をとってやるわけです。向こうさん（Ｉ市　みどり環境部）のお客さんを減らしてしまうことになるのではないですか？」

C「そんなことはないと思います。市民の人にゴミ問題に協力してもらわないといけないんですよ。施設見学は必要です。百聞は一見に然ずですよ。」

E「クリーンランドが，マイクロバスをもっているんじゃないんですか？」

G「(受講者は) バラバラに行かない方がいいですよ。」

C「足がないのでどうしたらいいですかと，クリーンランドに訊いてみてください。」

H「これ宿題にさせてください。」

次に，「子どもの環境学習について」協議されたが，結局，削除されることになった。その代わりに，Cが次のような提案をした。

C「講座の最後に話し合う時間を設けたらどうですか？　私たちがコーディネーターをやって，第6回目の時に，アンケートを出してもらって，次の回に，それをもとに議論できたらいいなと思います。他の人の意見を参考にしてもらえばいいのかなと……」

これに対してGは次のような疑問を提示した。

G「話を聴くのはいいけど，発言するのはイヤやという人もいるかもしれません。」

ここで，HはCの提案に「じゃ，最後にそれをもってきましょう。30人来るかどうかわかりませんが……」と賛成をして，第7回目は議論をする回になった。今回は，このように講座の方法・内容についての議論がなされた。

・第5回会議　8月1日（出席者6名　A　B　C　E　G　H）

今回の会議で問題となったのは，前回問題となったI市クリーンランドの見学の方法と，講座の宣伝チラシの文面についてであった。館外での見学の方法をめぐって，次のような緊迫したやりとりがあった。

G「クリーンランドまで行く方法を考えないといけません。参加者をいかに誘導するかが大事です。どこから入るか，誘導しないといけないんです。参加者にはっきり指示しないといけませんよ。」

H「参加者の方にご協力をいただいて，一人は駐車場，一人は入り口に立ってもらうことになります。土曜日がだめで，11月11～14日の平日ということになりますので，この中で誰が参加できますか？」

B「市バスをチャーターしたらいくらぐらいかかりますか？」

C「1回尋ねてみたらいかがですか？」

G「バスをチャーターするのが一番いいと思います。」

H「三々五々になるでしょうね。お金がないんです。」

G「お金がないというのはダメですね。」

C「チャーターはちょっと無理だろうね。平日だから人数は減るし。」

H「バスをチャーターするという想定はなかったんです。」

B「今のHさんの話だと，バスはチャーターしないことが，一方的に決められていたということですね。同じ市の関係なんで，チャーター料金を半額にしましょうということだってあるんじゃないですか？」

H「すいません。市バスのチャーターの件につきましては，うちの公民館の予算が使えるかどうか，宿題にさせてください。見学はやるということで。最終的に，どうしてもお手上げ状態になった場合は，しかるべき情報提供をして，なるべくスムーズに施設見学をしていただくということでいいですね？」

BとC「いいです。」（Gは無言）

次に，宣伝チラシの文面をめぐりCとGの間で葛藤が見られた。Hはまず各企画委員に一人づつ尋ねて，次のように黒板に書いていった。

A：お金を払っても値打ちのある講座
B：地球の未来はあなたの未来～ともに考え行動しましょう
C：もしも地球が話せたら：今地球に何が起こっているか：私たちの暮らしと環境問題
E：地球を守ろう
G：未来への希望を夢見て

Hは黒板に「未来の地球を夢見て」と書いた。

C「それはまずいんじゃないかな。今はもう夢を見る段階じゃない。もっと危機感があったほうがよい。」

B「危機感を煽るんだったら……」

G（発言を遮って）「危機感を煽るのはよくないよ。」

C「希望をもつのとはちょっとちがうんだよ。将来，たいへんなことになるか

ら，手を打たなアカンということ。夢じゃないんだよ！」

G「夢をもたなければ力が出ない！」

しばらくCとGの間で平行線の議論が続き，Hは困り果てて次のように発言した。

H「次回1回だけなんで……基本的には私の宿題にさせてください。Hが勝手に決めてしまったということだけは避けたいんです。市民自主企画講座だから。」

・第6回会議　8月22日（出席者6名　A　C　D　E　G　H）

会議の開始時間前に（18：56），非公式で話が始まった。今回で企画会議が終了するので，Hは終始自分のペースで会議を進行した。まず，前回で問題になったチラシのメインタイトルについて，Gが提案した「今みつめよう地球環境の未来」というテーマが原案として出された。これにCが反対の態度を表明した。

C「もうかなりせっぱつまったものだから，気持ち的には，他人事ではなく，一人一人が行動を起こすものであってほしい。行動を訴えていくことが必要だと思います。」

G「メインタイトルはこれでいいのではないでしょうか。」

C（重なって）「まぁ　これでいいと思いますが……リード文をもう少し大きくしてもいいんじゃないでしょうか。」

ここでCがGに譲歩することで問題が解決された。

次に，料金の問題について，Hは次のように明言した。

H「料金については，上司とも詰めて，全回を通して1000円としました。全回やるとほんとうは1700円になるので，良心的にやっていると思います。料金については，企画会議では決められません。これはすいません。」

C「より多くの人に聴いてもらいたいという気持ちはありますね。あまり，混乱させてもいけないと思いますので，お任せします。」

ここではCがHに譲歩した。

さらに，「クリーンランド見学」で市バスをチャーターする件でHは次のよ

うに述べた。

H「前回の会議が終了して，交通局に尋ねましたら，１時間で23,310円かかるとのことです。実際に，クリーンランドに行って確認してきましたが，当日の場所は決して迷うところではありません。バスをこの講座のためにチャーターすることもないだろうと思います。チャーターの件については，しないということでお願いしたいと思います。クリーンランドの職員が２名，案内役をしていただきますので，すいません，これで対応できると思います。参加者の方が迷うことがないようにします。これでよろしいでしょうか？」

企画委員一同（沈黙）

H「ありがとうございます！」

３．考察：企画会議をめぐる影響要因

本節では，まずセルベロらの理論をもとに，企画会議に常時出席していた６名の企画委員と１名の職員の計７名が，講座プログラムの形成過程でどのような権力関係にあったのかを考察する。このうち環境問題について詳しい発言をしていたのは委員Ｂであった。企画会議全体を通してＢの力量は光っており，環境問題についての造詣が深いことが窺われた。Ｂは他の委員の話をよく聴いて，それに自分の意見を重ねて意見を述べていた。Ｂは環境問題についての，NPO 法人ネットワーク「地球村」の世話人も務めている。

Ｃは，企業での研修に関わった経験を生かしつつ，環境学習という啓発系の講座は参加料金をできるだけ低く抑えることで，より多くの参加者を集めるように主張した。これは「正論」であったが採用されなかった。Ｃはこの企画会議全体でもっとも譲歩を強いられた委員であった。Ｄは，地味ながらも環境問題について意味のある意見を述べていた。Ｇは，第２回の会議で自然問題についての講座を開きたい旨を述べていた。それは今回の講座プログラムには直接反映されなかったが，講座についてのアイデアを多く持っていたことが窺えた。一方，ＡとＥは，会議全体でプログラムの形成に直接貢献する発言をしなかった。そして，７名中もっとも大きな権力を行使したのは職員Ｈであった。

職員Hは，環境問題についての専門家ではない。したがって，環境学習のプログラムを創るにあたり，内容（contents）についての知見は，企画委員の力量に委ねられることになった。全回を通じて，大きな混乱なく企画会議が進められたのは，Hが，各企画委員の発言に耳を傾け，そのすべてを生かそうとした良心的な姿勢を示したからである。それは，第2回会議に表れている。職員が協議の中で，限られた回数の講座を企画していく際に，ある人の企画を採用し，ある人の企画を不採用にすることがよくあるが，Hは，秋の講座でゴミ問題を扱い，それ以外の企画に基づく講座を，第2段として冬に，第3段として春に実施すると明言することで，企画委員の間に「合意」（consent）をとりつけた。このことについて，Hは筆者のインタビューに次のように答えている。

「ある程度考えているんですけど，そんな理論とかマニュアルみたいなものはないんです。はじめてなもので，とりあえず意見をたくさん出してもらって，それを整理して，こういう感じですけどどうですかと，さらに意見を求めて，骨組みを組み立てて一応，ある程度こっちの思惑もありながら，話の中で，こういうことも考えているのなら……せっかくだから，いろいろ詰め込むのもなんだから，第2弾，第3弾にしようかと，……ある程度，テーマを絞って，ホップ・ステップ・ジャンプにしようとしたわけです。」

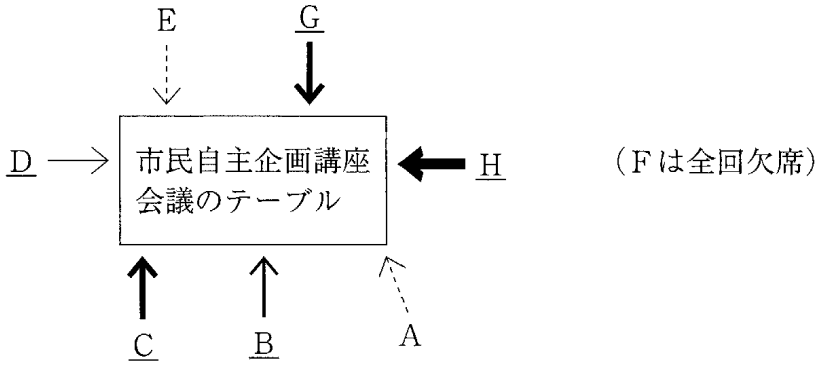
しかし実際には，2003年度に第2弾，第3弾の講座は実施されなかった。これは合意形成のためのその場しのぎの発言であり，企画委員にとって信義に反することである。

また，職員Hの影響力の大きさは，企画委員間で意見が対立した時に表れている。第5回会議で，チラシの文案で，CとGが対立した時には判断を保留したものの，第6回会議ではGの文案を支持して原案として出してきた。これは，環境問題について学習する際に，市民に明るい未来を期待してもらおうというGの意見を採用したことによる。また，施設見学で市バスのチャーターを，BとGが強く希望していたが，第6回会議でそれはできないことを明言して，企画委員全員に強引に了解を求めている。また，第4回会議で，Cが講座の最後に講座全体をふりかえって受講者が話し合う回を設けたらどうかという意見に

対してGが反対したものの，Hはその場でCの意見を採用して，講座の第７回目をフリートークの回とした。職員Hは気持ちのうえでは，できるだけ企画委員間の協議に委ねて，意思決定に関わらないとしながらも，講座プログラムの形成過程において重要な決定をしている権力主体であることが看取される。

こうした分析から，筆者はセルベロらの理論を参考にしながら，市民自主企画講座会議のテーブルをめぐる出席者の権力関係を図にしてみた。（図１）は，企画委員と職員の企画会議出席者計７名の権力関係について示している。職員H以外に，講座プログラムの形成に影響力があったのは，C，G，B，Dの順である。[2] 職員Hはほとんど毎回，会議の議論をまとめて次回の会議の冒頭に黒板で示す努力を行っており，この企画会議は十分に学習組織にもなりえていた。[3]

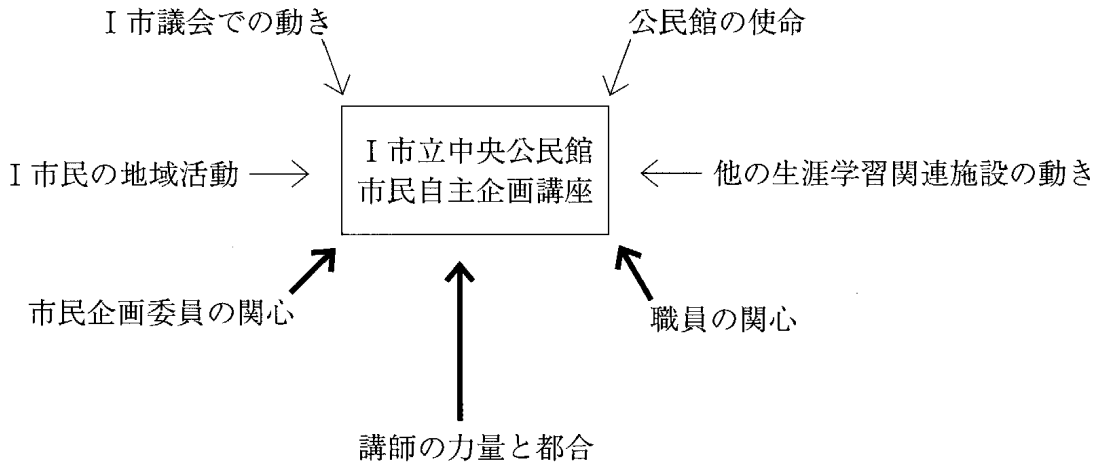
（図１）市民自主企画講座会議出席者の権力関係



次に，カファレラの理論を参考にして，市民自主企画講座をめぐる影響要因を（図２）のようにまとめてみた。カファレラは，５つの信念が倫理的なプログラムを作成する際の意思決定に影響要因として働いていることを論じたが，筆者は彼女の理論モデルを次のように解釈し直し修正したうえで適用する。「プログラム計画者の個人的信念」は「企画委員の関心」に，「組織上の信念」と「教育部門の信念の表明」は「公民館の使命」に，「地域社会と社会の信念」は「市議会での動き」と「市民の活動」に，「専門職としての倫理コード」は「職員の関心」と解釈される。筆者はさらに「他の生涯学習関連施設の動き」と「講師の力量と都合」の２つの要因を加える必要を感じた。７つの影響要因の中で

もっとも影響力があったのは職員の関心であり次いで企画委員の関心である。それらを取り巻くのは市議会での動き―Ｉ市環境基本条例が2003年10月１日に施行されたこと―である。

（図２）市民自主企画講座プログラム形成をめぐる影響要因



次に職員Ｈの対応の瑕疵についても指摘しておく必要があろう。第４回会議においてクリーンランドの見学に際して，市バスをチャーターする件について，Ｈは「これ宿題にさせてください」と言った。しかし，第５回会議の冒頭で，その「宿題」の成果を表明することなく，再び市バスをチャーターできるかどうかの問題に直面している。これは施設見学に消極的な関心しかもたなかったＨの不手際であった。また，第２回会議において，講座全体を有料とするか無料とするかという問題について，環境問題という現代的課題について学ぶ機会を市民に開く際に，できるだけ無料かそれに近い低料金であるべきだというＣの意見があったが，それに対して，Ｈは講座を有料とすることで受講者の脱落を防ぎたいと言うことで問題をすり代えてしまった。これら２点は，いずれも職員ＨがＩ市の公民館の財政問題を背負った計画主体であることを示している。そして，Ｈはこれらの点については，市民企画委員の関心を無視してでも強引に合意形成を図らなければならなかったのである。

４．よりよい市民企画講座をめざして

2003度のＩ市立中央公民館の市民自主企画講座「今みつめよう地球環境の未

来」は，無事に終了した。そこでの反省点を５点挙げて今後のよりよい市民企画講座への研究課題としたい。

第１点は，予想したよりも大幅に講座参加者数が少なかったことである。各回の講座の内容と参加者数は次の通りであった。

今みつめよう地球環境の未来		
第１回	11月１日【公開講座】地球にやさしい人になろう	19名
第２回	11月８日Ｉの環境への取り組み～Ｉ市環境基本条例を知ろう～	10名
第３回	11月14日Ｉのごみ最前線～Ｔ市・Ｉ市クリーンランド見学～	９名
第４回	11月22日海の向こうのごみ事情～環境先進国・ドイツとデンマークに学ぶ	14名
第５回	11月29日今日からはじめよう！環境家計簿～地球温暖化防止のために～	７名
第６回	12月６日紫外線と私たちの暮らし～人にもたらす害とその原因・対策を探る	６名
第７回	12月13日Ｉの環境を守るために私たちが今できること～フリートーク～	11名

平均しても，定員30名の半分を下回る実績である。この原因について，市民への講座のＰＲ不足や広報の打ち方が考えられるが，環境問題という啓発に関わる講座でありながら，全７回で1000円の参加料金を徴収することを決めたことが挙げられよう。第２回会議で，企画委員Ｃが参加料金について，無料かできるだけ低く抑えたほうがよいと発言していたにも関わらず，職員Ｈはむしろ参加料金を取ることで講座参加者の脱落を防ぎたいと答えたことの結果である。これは公民館側の財政問題と絡む問題ではあるが，この講座プログラム全体を，無料かそれに近い金額にしたほうが，より多くの講座参加者を見込めたのではないだろうか。

第２点は，会議での企画委員たちの関心と，実際に講義をした講師の関心にずれが生じたことである。講座の第４回目を担当した講師から，講義の中で次のような発言があった。「この講座を依頼された時に，環境問題の取り組みについて，日本は遅れている，ヨーロッパは進んでいるという話をしてほしいと依頼されたが，私はそうは思っていません。」

この講師は，環境問題の解決のためには人々の意識よりも，環境を保全する社会システムをつくることの方が大切であるという問題意識を強調した。講義

後の質疑の時間に受講者の女性から「では私たちはどうすればよいのでしょうか？」という質問があった。この質問に対して，同講師は企業が情報を公開していくことと，消費者が「環境情報ラベル」を気をつけて見て製品を選択する必要があると答えたにとどまった。職員Hは，こうした問題関心のズレについて「もっと事前に講師についてリサーチをしておくべきでした」と筆者に語っている。事前に，講師候補者から，簡単なレジュメをFAXやEメールで送ってもらい，それを企画会議で検討して，企画委員の関心に沿わないのであれば，他の講師候補者も検討すべきであったと思われる。

第3点は，企画委員がどれだけ市民の学習ニーズを知っていたかである。自主企画講座の企画委員は，市民全体を代表しているわけではない。今回のケースは環境問題について先鋭的な問題意識をもった一部の市民が企画委員として集まったにすぎない。佐伯啓思が指摘するように，市民の意見の代表性が問われよう。（佐伯）ここには，企画委員の問題意識だけで学習プログラムが決められてしまう危うさがある。企画会議の過程で，環境問題のどの部分について知りたいかを身の回りの市民に聴いてみることも必要だったのではないだろうか。この点で，セルベロらの理論では，プログラム計画とは，計画者が世界を創る活動であるということが先行して，学習者のニーズを調査し検討することは等閑視されている。今後，セルベロらの計画理論を，学習者のニーズ調査を含めてより包括的に構成していく必要があろう。

第4点は「市民自主企画講座」という名称についてである。「市民自主企画」と名のるからには，職員は介在しないというのが筋であろう。これは，他の自治体が多く採用しているように，職員も協議のテーブルに臨む「市民企画講座」という名称でよいのではないだろうか。第5回会議で，職員Hは，「Hが勝手に決めてしまったということだけは避けたいんです。市民自主企画講座だから。」と言った。ここには，できるだけ職員は権力を行使せずに，企画委員だけで問題解決をしてほしいという願望が出ている。しかしながら，現実の場面で，企画委員間の意見の隔たりを埋めたり，葛藤を解決するためには職員の権力の行使は不可避である。職員は，機械的に企画委員の意見をまとめているわ

けではなく，ある講座イメージを創るために一定の介入を行わざるえないのである。

最後に第５点として，市民企画委員に求められる力量について言及しておきたい。ほとんどの自治体では，市民が自薦で市民企画委員に応募しておりそれを全員採用しており，選考はないに等しい。したがって，どんな市民が企画委員になるかによって，その企画会議の内実が決定される。市民企画委員の力量が一定水準になるように，事前に，応募する市民に「企画委員としての抱負」「環境問題について考えること」といった課題を与え，作文にして送ってもらい，それを公民館側が審査するという仕組みが必要であろう。実質的には，市民企画委員には，学習プログラムのテーマに関連した活動歴や研究歴，関連書籍や著者についての知識や，講師候補者との人的コネクション等が求められよう。また，いくつかの公民館で実施されている「公民館講座企画力養成講座」において，事前に市民企画委員を育成して，その講座修了者から市民企画委員の希望者を募ることも，よりよい市民企画講座プログラムの形成にとって有益であると思われる。

謝辞：本研究にご協力いただいたＩ市立中央公民館の館長ならびに職員の皆様に心より感謝申し上げます。

注

1）成人教育プログラム計画をめぐる権力の問題については，Cervero & Wilson ed., 2001を参照のこと。日本では，岡本包治や金藤ふゆ子などの先行研究があるが，計画場面における計画者間の権力の問題は扱われていない。

2）筆者のフィールドノートの記録にしたがって，７人の出席者各人の全発言回数を出席回数で割ると，一回あたりの発言回数は次のようになった。Ａ：2.1回，Ｂ：9.25回，Ｃ：13回，Ｄ：3.6回，Ｅ：1.3回，Ｇ：5.3回，Ｈ：16.5回であり，Ｈが一番多いことがわかる。

3）学習組織(learning organization)論については，ワトキンス＆マーシックや野中郁次郎，竹内弘高を参照のこと。現状では，企業における商品開発や顧客サービスの現場を学習組織と見なす研究が多くなされている。

引用・参考文献

赤尾勝己　2001「アメリカにおける成人教育プログラム計画理論の動向―R. カファレラとR. セルベロを手がかりに―」日本社会教育学会紀要第37号。

赤尾勝己　2002「社会教育施設における市民企画講座プログラムの形成過程に関する一考察―三つの施設での聴き取り調査を手がかりに―」関西大学文学論集第51巻第3号。

赤尾勝己　2004「男女共同参画推進センターにおける市民企画講座プログラムの形成過程―講座企画委員会での参与観察を手がかりに―」日本社会教育学会紀要第40号。

Caffarella, Rosemary. S 1994, Planning Programs for Adult Learners, Jossey-Bass.

Cervero, Ronald & Wilson, Arthur 1994, Program Responsibly for Adult Education, Jossey-Bass.

Cervero, Ronald & Wilson, Arthur ed., 2001, Power in Practice: Adult Education and the Struggle for Knowledge and Power in Society, Jossey-Bass.

Forester, John 1989, Planning in the Face of Power, University of California Press.

金藤ふゆ子　2001「学習プログラムの革新」白石克己，金藤ふゆ子，廣瀬隆人編『学習プログラムの革新―学習者がつくる学びの世界―』ぎょうせい。

Knowles, Malcolm S 1980, The Modern Practice of Adult Education; from Pedagogy to Andragogy, Cambridge. 堀薫夫，三輪建二監訳　2002『成人教育の現代的実践』鳳書房。

野中郁次郎，竹内弘高著，梅本勝博訳　1996『知識創造企業』東洋経済新報社。

岡本包治　1998『生涯学習活動のプログラム』（財）全日本社会教育連合会。

佐伯啓思　1997『「市民」とは誰か』PHP 研究所。

ワトキンス K. E. &マーシック V. J. 著，神田良，岩崎尚人訳　1995『学習する組織をつくる』JMAM。

（付記）Ｉ市立中央公民館では，2004年度から本稿で扱った「市民自主企画講座」方式に代えて，公民館事業推進委員会を設置し，その下に「講座企画運営部会」を発足させている。これは，館長以下複数の職員と市民委員が一同に会し，双方からの講座企画の提案を総合的に審議し，プログラムの詳細や講師の決定については，職員と市民が２名１組で行うものである。